

FORUM

Vol.38

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース
「フォーラム」

第 38 号

CONTENTS

巻頭言 2

学長特別補佐（羽曳野キャンパス担当）、
地域保健学域長、総合リハビリテーション学研究科長
奥田 邦晴

コラム 3

サステナビリティ教育の必要性
現代システム科学域長
大塚 耕司

授業報告 4

高等教育推進機構 准教授
川端 悠

学生 FD スタッフ活動 5

授業支援システムの利用について 6

人間社会システム科学研究科 准教授
小島篤博

編集後記 8

巻頭言

● 地域保健学域長、総合リハビリテーション学域研究科長、
学長特別補佐（羽曳野キャンパス担当）

奥田 邦晴

OKUDA KUNIHARU



奥田 邦晴

OKUDA KUNIHARU

大阪外国語大学卒業、大阪府立大学大学院社会福祉学研究科博士前期課程修了、川崎医療福祉大学大学院博士後期課程修了 博士（医療福祉学）。大阪府立身体障害者福祉センター勤務を経て、1994年より羽曳野キャンパスの前身である大阪府立看護大学医療技術短期大学部講師、2003年より大阪府立看護大学総合リハビリテーション学部教授、2005年より大阪府立大学教授。

専門は、障がい者スポーツ。一般社団法人日本ボッチャ協会代表理事を務め、火ノ玉ジャパンの2020東京パラリンピックでのメダル獲得をめざし奮闘中。

リハビリテーション専門職養成の教育に思うこと

理学療法士及び作業療法士の養成カリキュラムは、平成11年の大綱化以降およそ20年ぶりに来年4月から大幅な改正が行われる。高齢化の進展に伴う医療需要の増大や地域包括ケアシステムの構築により、求められる役割や知識が変化したことによる。また、先んじて臨床実習の在り方の見直しが行われている。PT・OTカリキュラム等改善検討会のアンケート調査によれば、臨床実習中に75%以上の学生が「毎日自宅に持ち帰り課題を行っていた」と回答し、自宅で課題に費やす1日あたりの時間数について60%以上が「3時間以上」であったことが報告されている。

本学理学療法専攻の臨床実習を例にとると、2年次に1週間の病院見学実習、3年次年度末に3週間の評価実習、4年次に約2ヶ月の治療実習を2回、そして1週間の訪問リハビリテーション見学実習を行っている。

長かった臨床実習を終え戻ってきた学生に感想を聞くと、「一杯一杯でした」、「大変でした」と青い顔でこたえる学生も多々いる。今のマニュアル世代の学生にとって、白衣をまとい、たった一人で緊迫した未知の医療最前線の領域に足を踏み入れ、学生とはいえ、患者やクライアントを相手に、そして厳しいと思い込んでいる臨床実習指導者のもと、2ヶ月間を全うすることは、多大なストレスでしかない。学生同士のLINEのやりとりでは、「何時間寝た？、夕べは2時間、凄く私負けてるっ」といった、驚くような事象も常態化していた。帰宅後自宅でのレポートなどの成果物作成に時間が必要で睡眠時間が非常に短く、折角の臨床場面での集中力を欠き、注意を受ける学生も少なからずいた。

養成校の急激な増加に伴い、年々、実習回数及び期間の減少が進んできており、それに対して本学では、およそ10年前から臨床教育の効果向上を目的に、書き物の減少化、金曜までの課題解決の奨励（土・日の解放）を行うなど課題解決に努めてきている。また、2012年から新たに4年次に訪問リハビリテーションを組み込み、時代を取りしつながらのある臨床教育をプログラム化し、成果を上げてきた。

今回予定されているカリキュラム変更は、このブラック臨床実習にメスを入れるものであり、まさに我々が考案、実施して

きた府大カリキュラムの後追いの状況であると自負したい。

ここに至るのに、旧来型の実習を経験してきている臨床実習指導者の脳内改革に相当な時間とエネルギーを費やしたと、そして学生にも、臨床実習＝試験と認識しないことをくどいほど、繰り返し伝えてきた。真面目な学生ほど、土、日も実習に使いたがる学生が多く、不真面目な学生もあわせリタイアする者もいた。

他大学とは異なる府大ならではの、人間愛にあふれた優秀な医療専門職者を輩出するには、より一層の専門教育の充実は無条件であるが、指定規則で縛られている101単位以外の32単位の教養教育こそが非常に重要な鍵を握っている。今の時代の多くの学生は、小学生時代から受験経験があり、中学校時代も常に明日をを考えながら、勉強とクラブ活動の両立でタイトな時間を過ごしてきている。特に、学生の多くは、どのようにしたら良い点数を取れるか、試験の匠であり、損得を嗅ぎ分ける能力に優れた効率家である。私は新入生に、「先輩達は全員が国家試験に合格し、将来は大学院への進学も含め約束されている。府大に入学した今こそ、明日や未来を見るのではなく、過去に時間がなくてしたくてもできなかったことや無駄と置いておきなことを、やってみて欲しい」と伝える。少しでも良い点数をとるために、自分のために時間を費やしてきた人は、人のために時間を使って欲しいとも言う。

初年次から専門教育にも触れさせたいので、羽曳野キャンパスの学生は、水・木の2日間中百舌鳥キャンパスで教養科目を受けている。学生には一つでも多く、そしてリハビリテーションや看護に関係がないと思われる科目も自由に選択して欲しい。教育福祉学類や他学域の学生達とつながれるのも1年生のこの機会である。彼らは、2年次からは羽曳野にこもり、過密なスケジュールの中、専門科目と実習に取り組んでいく。

が、現実には、なかなかそうではない。配慮いただいていることは承知の上で、今以上に、水・木曜日の科目数の増加や時間配置の工夫など選択肢を広げていただくことそして、抽選？も検討・配慮してくれないかなと願っている。

サステナビリティ教育の必要性

現代社会には、地球温暖化や人口爆発による水・食糧・エネルギー危機といった地球規模の問題、富の集中と貧困、宗教・価値観の違いによる国家・地域間の対立、都市域における格差社会や高齢社会の問題、心の病と生きる意味の喪失など、実にさまざまな問題が存在し、我々の暮らしに大きな脅威を与えています。2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」では、そのようなグローバルな問題からローカルな問題まですべてを解決に導く手段として、2030年までに達成すべき17の持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）が示されました。

このように多様で複雑な問題を抱える現代において、すべての人々の尊厳が守られ、人としての包括的なウェルビーイング（身体的・精神的・社会的に良好な状態）が世代を超えて保証される社会、すなわちサステナブル（持続可能）な社会を実現するためには、資源・エネルギーの持続的利用やそれを支える生態系の保全といった自然科学、多様な歴史や文化を背景に持つ人々が共生するための社会の仕組みづくりといった社会科学、便利さや物質的豊かさを際限なく追求するのではなく、限りある資源を分かち合うことに豊かさを感じることでできる幸福感・共生感の醸成といった人間科学、各々の観点からのアプローチが必要となります。さらに、これらの幅広い知識をできるだけ広範囲で効率的に共有し活用するための情報技術の発展も重要です。

このような幅広い知識をバランスよく理解し、ある領域の知識を別の領域に適用したり、複数の領域の知識を融合させたりすることのできる「領域横断的応用力」が、サステナブルな社会の実現には不可欠です。

一方、限りある資源を無駄なく公平に皆が分かち合うためには、その資源を生み出す自然資本（natural capital）を保全し、人のつながりや信頼関係などの社会関係資本（social capital）を充実させなければならず、それを支えるものの一つに技術革新があることも疑いようがありません。現代社会の問題を解決するためには、地球規模の問題にかかわる再生可能エネルギー技術や食糧生産技術、富の分配や多様な価値観を融合させるための社会制度の構築に必要な技術、格差社会や高齢化社会の中で取り残されている人々を救うためのヒューマンサービス技術など、あらゆる階層における多様な技術の革新が必要となります。また、これらの要素技術を個々に捉えるのではなく、それらを組み合わせることによって全体として最適な状態を実現することのできる「システムの思考力」も、サステナブルな社会の実現には不可欠です。

現代システム科学域は、領域横断的応用力とシステムの思考力を養成することによって、様々な学問分野が連携してこそ解決できる、現代の複雑な問題に対する解決能力とサステナブルな社会を実現するという高い志を持った人材の育成に重点を置いた教育を推進しています。



大塚 耕司

OTSUKA KOJI

現代システム科学域長

1989年大阪府立大学大学院工学研究科博士前期課程修了、同年大阪府立大学工学部助手、その後、講師、助教授を経て2007年大阪府立大学大学院工学研究科教授、2016年より大阪府立大学現代システム科学域長。専門は海洋環境学、海洋資源工学。

「健康・スポーツ科学概論」

川端 悠

(高等教育推進機構 准教授)

—— 川端先生の「健康・スポーツ科学概論」のシラバスでは、『健康を維持しながら効果的にスポーツに取り組む方法』の追究がメインテーマとされています。授業内容や授業方法についてお話しください ——

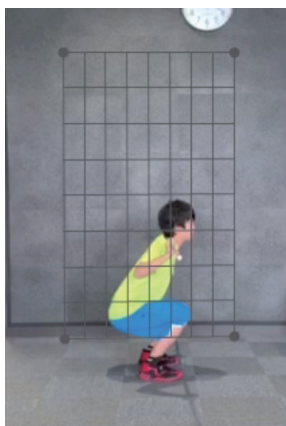
「健康・スポーツ科学概論」では、ヒトの健康やスポーツに関連したテーマを毎回設け、学生が主体的に学ぶことができる授業展開を目指しています。一般的に、スポーツは、ヒトの健康に良い影響を与えていると言われていますが、不適切な方法でスポーツを行うと、思わぬけがや事故につながり、健康を損ねてしまいかねません。また、スポーツをする目的は個人で異なるものなので、その目的を効果的に達成するためには、どのような方法が一番良いかを個人が知ることが非常に重要です。自分に適切な方法でスポーツに取り組み、人間が生み出した大きな文化であるスポーツと上手に付き合いながら健康を維持できる能力の修得を授業の目標としています。この授業は講義科目なのですが、学生が主体的に学べる授業展開に努めており、例えば、80 人の受講者を 4 ～ 5 人程度のグループに分け、スマートフォンとパソコンを使ったヒトの動作解析を行う授業もしています。

—— スマートフォンとパソコンを使ったヒトの動作解析についてのグループでの学習とは具体的にはどのようなものですか ——

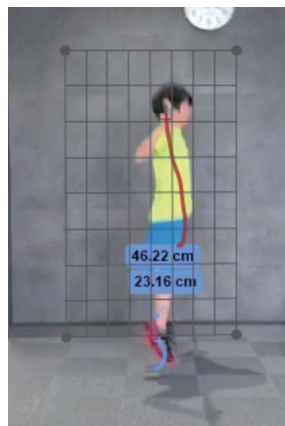
近年はフリーソフトで高性能な Windows 用動作解析ソフト KINOVEA が臨床現場やスポーツパフォーマンス評価にかかわる研究でも広く利用されています。私は運動生理学を研究しており、自分の研究のなかでも、KINOVEA でスプリント能力(走力)や運動中の関節可動域を計測しています。この授業で行う動作解析のテーマは、イスからの立ち上がりとスクワットジャンプです。簡単に解析手順を紹介すると、格子状の目印を付けた壁の前で、スマートフォンで動画撮影を行います。この時スマートフォンは三脚等で固定し背景を一定に保ちます。撮影された動画ファイルをパソコンに取り込み、KINOVEA で解析します。細かな解析方法は割愛しますが、シンプルな操作で側面から見た肩や腰の移動速度、軌跡、距離などを定量的に理解することができます。学生自身のスマートフォンを使用するので、グループワークも比較的容易にできます。受講生が 1 回生ということもあり、スマートフォンの操作が得意でもパソコンの使用はまだ苦手な学生が多いようで、パソコンによる解析に多少てこずるようです。しかし、KINOVEA は感覚的な操作で解析が行えますし、少人数のグループワークなので、授業の課題に必要なデータが最終的には得られます。

—— ICT 技術の進歩によって、従来できなかったことが比較的容易にできるわけですね。この学習のポイントは何かですか ——

この授業を通じて、これまで感覚的にしか理解できなかった身体動作を定量的に理解するきっかけを学生へ提供できたと思います。ジャンプなどの高い低いは感覚的なもので相対的です。身体動作もそれぞれのクセがあります。しかし、受講者各自の身体動作について“現実の世界”を“数理の世界”に置き換えることが可能となりますので、今後のスポーツを行う際に活かすことができます。このような授業を今後も継続できるよう努めたいと思います。(まとめ、高根)

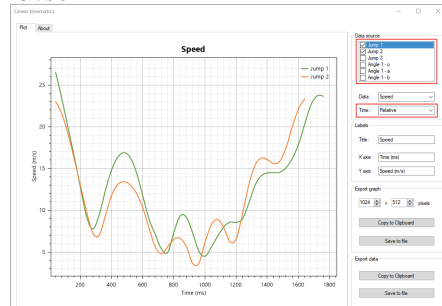


写真左) 初期姿勢



写真右) 移動軌跡と距離

参考 1
時系列データ



X 軸が時間、Y 軸が動作速度を示しています。裾野が狭く、高い山は素早い動作を示し、裾野が広く、低い山はゆっくりとした動作を示します。

参考 2

KINOVEA ホームページ <https://www.kinovea.org/>

学生FDスタッフの活動を通して得たもの

生命環境科学域 自然科学類 4年 高木 映実

学生 FD スタッフでは、学生と教職員の方々が共働し、大阪府立大学における学生生活がより良いものとなるように、様々な企画を考案・実施しています。今回は、その一環として行った「レポートの書き方講座」について報告します。

5月16日・17日にB2棟ラーニング commonsのプレゼンテーションエリアにて、主に1年次生を対象に「レポートの書き方講座」を行いました。大学で課されるレポートは、入学したばかりの新入生が躓きやすいものであり、その書き方について一度体系的に学ぶ必要があるのではないかと考え、企画しました。1日目は、レポートの形式や論理的な文章の書き方についてのレクチャーを行いました。また、レポートを書く際に必要な参考文献の探し方について概説しました。2日目は、1日目に解説したレポートを実際、どのように作成していけばよいかについて、Wordを用いて実践形式で学んでいただきました。

両日とも、参加者は熱心に聴いており、アンケートの結果からも、レポートの書き方の基礎を身に付けていただくことができたのではないかと考えています。2日に分けて開催したことで、参加者がそれぞれのニーズにあわせて参加する講座を選択することができ、満足度を高める結果につながったのではないかと考えています。例えば2日目には、Wordの使い方に関して体系的に学んだことがないため、一度しっかりと学んでみたいという学生が参加されていました。

一方で、2日開催の弊害も見受けられました。両日参加された人数が少なかったことです。教養科目含め履修科目が多いため、1日しか参加できないという学生も多くいたようです。また、2日目は参加する際にPC持参が必須だったため、自宅からPCを持って来ることが困難な学生や、そもそもPCを持っていない学生には参加しにくい条件だったかもしれません。企画の実施方法を決定することの難しさを実感することとなりました。広報活動を充実させ、各講座の内容や本企画に参加するメリットをより具体的・明確に周知することができていれば、より多くの学生に参加いただくことができたかもしれません。

今回の企画運営を通して、スタッフ間のコミュニケーションの難しさについても痛感しました。企画担当のスタッフ全員が、共通認識・同一目標を持って作業を進めていくことは必須であり、私自身も当然、そのように今回の企画も進めていけるものだと考えていました。しかし、連絡が上手くとれずに作業を進められないことや、認識が異なったまま作業を進めてしまい、一からやり直しになってしまうこともありました。同じ言葉を聞いたとしても、人によってそれぞれイメージする内容が違う場合があります。指示が一方通行にならないように、認識を共有する機会を密にとり、作業進捗のより細かな確認をとることで、そのギャップを埋めることの大切さを実感しました。様々な考え・立場の人と共働して一つの企画を作り上げた経験は、これから社会に出ていく際の自信につながるとともに、大学生活における大切な思い出の一つにもなりました。

初心者向け レポートの 書き方講座

日時

2019年5月16日(木)・17日(金)
各日16:25~17:25

場所

B2棟ラーニング commons
プレゼンテーションエリア

実施内容

16日：レポートの基本、参考文献の探し方
17日：Wordの操作方法
！！17日はパソコンを持参してください！！

当日参加可能！！

PCは図書館で
借りられます！

主催 学生FD スタッフ



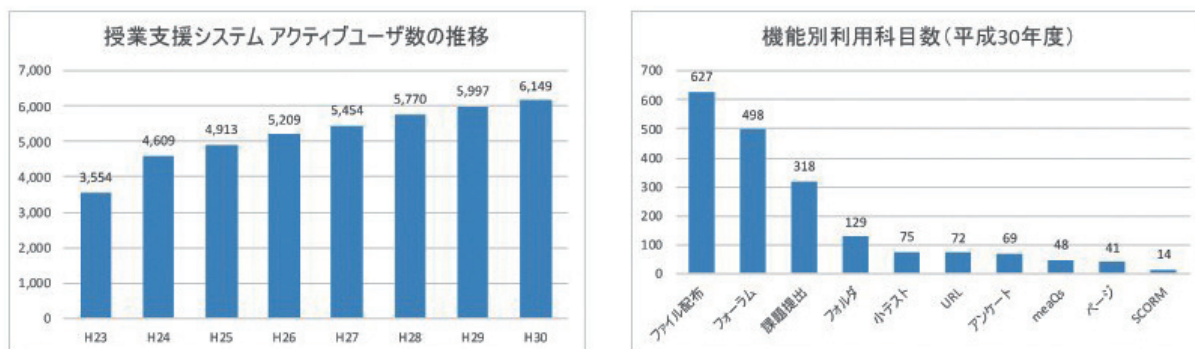
授業支援システムの利用について

人間社会システム科学研究科 准教授 小島 篤博

みなさんは授業支援システムを使われたことがありますか？授業支援システムは、講義資料の配布や課題の提出などができる Web ベースの学習支援環境で、Moodle というオープンソースの学習管理システム（LMS）を利用して運用されています。この記事では、まだ授業支援システムを使ったことがない、あるいはほとんど使ったことがないという方のために、このシステムの概要と基本的な使い方を紹介します。

まず Moodle について簡単に説明しますと、M.Dougiamas 氏が博士論文のための研究テーマとして開発を始め、現在も同氏を中心としたコミュニティによって開発が続けられている LMS で、世界中の大学で広く利用されています。本学でも、平成 23 年より公式サービスとして運用が開始され、当初の利用科目数は 470 でしたが、年々増加し昨年度（平成 30 年度）は 940 科目までになりました。また、アクティブユーザ数も昨年度は 6,000 人を超えています。（図 1）

< 図 1 >



授業支援システムの機能ごとの利用状況（その機能を利用している科目数）を見ますと、図 1 に示すようにファイル配布が最も多く、続いてフォーラム（掲示板）、課題提出、フォルダ、小テスト…という順になっています。実際、授業支援システムを使うかどうかは別として、講義資料をファイルとして配布するというのは、多くの授業で行われているのではないのでしょうか。課題提出についても、ファイルの形での提出を受け付けるのであれば、例えばメールなどで教員のアドレスに送信させるよりもずっと便利で確実ですので、ぜひ使っていただきたい機能の一つです。また学生にとっても、教員が自分のホームページで資料を配布するより、同じ一つのサイトですべての授業コンテンツにアクセスできるならば、その方が便利なのはです。本学の授業支援システムの運用ポリシーとして、教務システムと連携してすべての科目を自動登録することにしておりますので、アクセスしていただきさえすればすぐにでも使い始めることができます。

続いて、授業支援システムの基本的な使い方について説明したいと思います。ポータルでユーザ認証した後、授業支援システムにアクセスすると、あなたが担当している科目の一覧が表示されます。ここで科目を一つ選ぶと、図 2 のようなページが表示されます。

これが各科目のホームページになります。科目ページは、図のように各回の授業ごとにトピックという枠が用意されており、この枠の中にコンテンツを作成していきます。授業コンテンツには大きく分けて「リソース」と「活動」の 2 種類があり、このうち「リソース」は静的なコンテンツであり、教員と学生との間でのやり取りはなく、教員から学生に対する一方向的な情報提供になります。ファイル配布や他サイトへのリンク、各回トピックの概要説明などが該当します。もう一つの「活動」（原文の "activity" の方がイメージしやすいかもしれません）は、教員と学生との間に何らかのやり取りがあるインタラクティブなコンテンツで、課題提出や小テスト、アン

ケートなどが該当します。

科目ページにコンテンツを追加するためには、ページの右上にある「編集モードの開始」ボタンを押し、編集モードに入る必要があります。編集モードでは、通常は表示されない編集用のメニューやアイコンが表示され、新たにコンテンツを追加したり、既存のコンテンツを変更したりすることができます。なお、編集モードボタンはトグルになっており、もう一度押すと通常モードに戻ります。

トピックに新たにコンテンツを追加する場合は、トピック枠の右下にある「活動またはリソースを追加する」をクリックします。そうすると、追加するコンテンツの種別を選択するメニューが表示されますので、いずれかを選んで追加ボタンを押します。続いて、コンテンツの種類に応じた設定画面が表示されます。例えば、コンテンツとして「ファイル」を選んだ場合は、ファイルの名称を入力し、配布するファイルをドラッグ&ドロップで指定することになります。設定が終わったら保存ボタンを押すと、科目のページに新たにコンテンツが追加されます。他の種類のコンテンツも、いずれもこの手順で追加することができます。また、既に掲載されているコンテンツについては、それぞれの右側に表示されている「編集」をクリックすると、設定を変更したり、場所を移動したりすることができます。

以上、授業支援システムの使い方を簡単に説明しました。紙面の関係もあり、個別の機能についてはほとんど紹介できませんでしたが、例えば課題提出は、提出期限や、期限を過ぎた後での受付の可否など、細かく設定することができます。他にも多くの機能がありますので、どれか一つでも便利だなと思うものがあれば、まずはそこからでも使い始めていただければと思います。

授業支援システムの詳しいマニュアルは、ポータルの「マニュアル・FAQ」ページから「授業支援システム」でマニュアルを検索していただければ、教員向けガイドが参照できます。ぜひ授業支援システムをご活用ください。

＜図2＞



編集後記

高等教育開発センターニュース「フォーラム」第38号をお届けします。ご執筆頂いた方々に改めて御礼申し上げます。「フォーラム」は、2019年度も3回の発行を計画し、センターのFD活動について、本誌を通じて、広報して参ります。

センターは、6月4日にセミナー「Moodle活用講座」を開催しました。本号の「授業支援システムの利用について」では、セミナーの講師の一人でもあった人間社会システム科学研究科の小島先生が、Moodleの使い方について簡単に説明しています。とてもわかりやすい内容なので、Moodleを利用してみようという方は是非一読ください。(高根)

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース「フォーラム」

2019年8月6日発行

発行者 大阪府立大学
高等教育推進機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
<http://www.fd-center.osakafu-u.ac.jp/>
印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

<編集委員> 星野 聡孝(センター長) 新井 隆景(副センター長) 深野 政之(主任) 川添 充 小島 篤博
高根 雅啓 高野 順平 高橋 哲也 谷口 栄一 塚本 民雄 畑野 快 林 利治 森岡 次郎
<事務担当> 古谷 智美 藤岡 真弓 若本 理恵